

先生のきずなを求めて!

NPO
現代座

2020 年 12 月 1 日 発行
(通巻 487 号) 定価 100 円

現代座レポート No. 84

- ・第 4 回川崎平右衛門顕彰会・研究会開催 (1)
- ・『風は故郷へ』稽古風景 ・ホール of 楽屋が新しく (2)
- ・誰でもできる朗読教室 (3)
- ・「われらいずこより来たる」第 2 部 (1959 年①) (4-5)
- ・あれから 55 年 元気でやっとなるでよオ 山田敏雄 (6)
- ・誰でも参加できる・みんなのリトルコンサート (7)
- ・現代座会館をどう活用するか～タスクフォース
会館日誌 会員入会・継続・寄付 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX 042-381-6987

第 4 回川崎平右衛門顕彰会・研究会
11月20日 国分寺市いずみホールで開催

◆川崎平右衛門顕彰会・研究会は 2016 年、現代座の『武蔵野の歌が聞こえる』公演をきっかけに結成され 4 年目を迎えます。第 4 回の今年は春に岐阜県瑞穂市で行う予定でしたがコロナ禍で中止になりました。しかし何とかして開催したいと 8 月から準備を再開し、新田開発と関係の深い国分寺市のいずみホールで開催することができました。

300 人のホールですが、コロナ対策で 100 人までの入場者、定期的な換気、椅子の消毒、検温とマスク着用と、精一杯の準備をしての研究会になりました。参加者は国分寺市民中心に活動するグループである多摩地域の史談会、協同組合関係者、ワーカーズコープの仲間たちでした。

◆午前中は川原隆哲（ワーカーズコープ東京統括本部長）の開会挨拶ではじまり、映画『ワーカーズ・被災地につづ』の上映と映画監督森康行さんが参加されたトークショー。

◆総会を挟んで午後は講演とパネルディスカッションです。例年は大石学先生の会長講演が始まるのですが、大石先生は体調不良でお休みになり、今回は農的社会デザイン研究所代表の髙谷栄一さんが「国分寺地域の開発と川崎平右衛門」のテーマで講演されました。国分寺にあるふたつの川崎平右衛門供養塔の写真プロジェクトで映しながから享保の改革と川崎平右衛門の仕事と功績をわかりやすく

語られました。

◆今回の特別講演は国分寺市観光協会会長の星野信夫さんの「国分寺の歴史と文化」でした。国分寺市は日本で最初に旧石器時代の遺跡が発見された町であり、奈良時代の武蔵国分寺の建立と鎌倉時代の焼失、江戸時代の新田の開発、明治時代の国分寺村の誕生から現在まで。短い時間で生きたと語ってくださいました。

◆講演後のパネルディスカッションは髙谷栄一さんと星野信夫さんに、日本社会連帯機構専務理事の藤田徹さんも加わり、「地域創生と川崎平右衛門、そして協同」について熱く語り合いました。

◆今回の研究会スタッフの感想としては「川崎平右衛門と協同労働・労働者協同組合とのつながりが見えてきた」という特徴があり、同時に「競争する社会」「一人でいる社会」から協同の価値や意味をどのように伝えていくかが課題だとのこと。

◆江戸史における武蔵野は、北は荒川、東は隅田川、南は多摩川、西は狭山丘陵と広大な地域です。協同の営みをどう促進していくのかを考えると、川崎平右衛門なしには語れないと改めて考えさせられた研究会でした。

◆功労感謝状は、「川崎平右衛門顕彰会・研究会」創立発起人の一人で、今年 2 月に亡くなられた鹿子木孝男さんに贈られました。鹿子木さんは平右衛門の足跡を探求し、武蔵野新田地図を発掘された方です。



◆髙谷栄一さん
農的社会デザイン
研究所代表



◆星野信夫さん
国分寺市観光協会
会長



◆藤田 徹さん
日本社会連帯機構
専務理事



【功労感謝状】
鹿子木孝男さん

コロナ禍の中で 『風は故郷へ』劇中歌の稽古

コロナのために来年に延期した『風は故郷へ』公演のための稽古は、毎月みんなで集まって少しずつ進んでいます。戦後の日本社会が高度経済成長長期へ向かって大きく転換していく1980年代が背景です。国鉄がJRになり、かつては開拓地に通じた鉄道も廃線となり、開拓地は次々と消されて行きます。

取り残された二人の老人は、戦時中の満蒙開拓青少年義勇軍からシベリア抑留、そして戦後開拓と国の政策に従って生きてきました。国に捨てられた人間の最

後はどうあるべきかをテーマにした作品です。戦争の歴史や戦後の農業政策の変遷など、勉強しなければならぬことがたくさんあります。

10月は台本の読み合わせ。11月は芝居の中で歌う劇中歌の稽古を始めました。劇中歌はクラシックの合唱と違って、劇中人物として歌うため、一人一人の役柄が表現されなければなりません。これはけっこう厄介な仕事なのです。

劇中歌『高原分校の歌』は開拓者たちが子どもたちのために自力で分教場を建てた時、みんなでつくった歌です。地域の集まりでは大人も子供も一緒に歌ったものでした。今では数軒しか残っていない地区で、廃校になった校舎を偲びながらもう一度この歌を歌ってみようとしています。その歌の響きが思いがけない変化を呼び起こします。木村快作詞、岡田京子作曲の簡単な旋律の歌ですが、稽古してみるとそう簡単ではありませんでした。でも来年8月の舞台ではきつと素晴らしい劇中歌になるでしょう。

ホールの楽屋が新しくなりました

現代座ホールは地下にあるのですが、もう一層下の奈落と言われる部分に楽屋があります。舞台の両側から俳優が回り込む通路もかねて、細長く作られています。最初に造られてから40年以上になり、湿気対策の機能も相当劣化していました。コロナでホールが使用できない間に、思い切って改造することにしました。

鏡や棚をはずし、壁の板も床も全てはがして取り払いました。その下にあったコンクリートの壁と天井は

痛んでいる部分があったので、その補修は専門家に頼みました。しかし、新しい壁や床も業者に頼んで作ってもらうだけのお金がありません。

「よし、自分たちで少しずつやろう！」と決めたのですが、これは大変なことでした。

11月20日にはコロナ後初めての公演の予約が入っています。このままでは間に合わない、NPOメンバーの西河大さんと木の下敬志さんが徹夜したり、仕事を休んだりして、壁塗り、床張り、階段の取り付け、電気の配線等を頑張りました。そして公演前日に出来上がったのです。今までより広く明るい楽屋は使ってもらった俳優さんたちにもとても好評でした。



◆マスクをつけての合唱、実際は会場一杯に広がって歌いました



NPO現代座 誰でもできる朗読教室

講師 長谷川葉月

11月25日(水)と26日(木)の2日間にわたり「誰でもできる朗読教室」第9期生発表会が現代座会館3階小ホールでありました。今回は18名が6ヶ月の受講の成果を発表してくれました。そのうち5名が初参加で、澆刺とした声を聞かせてくれました。

今回は新型コロナウイルスによる感染対策の緊急事態宣言のため、4月開講が2ヶ月遅れの6月開講となりました。また、開講してからも感染予防対策として



(後列左より) 田中ヒロミ、井上照美、江花幸子、手塚修、小野寺優子、本田典子
(前列左より) 尾花はるみ、高嶋悦代、長谷川葉月(講師)、今井治江、佐藤忍



(後列左より) 白井雅紀、前田夏子、古明地節子、石川秀樹
(前列左より) 早乙女裕子、長谷川葉月(講師)、井上尚子、環笑子

お知らせ 誰でもできる朗読教室 2021年1月期 受講生募集

2021年1月開講 基礎訓練から舞台発表までの12回講座

開講期間／2021年1月～6月

①水曜日 昼クラス (原則第2週・第4週) 13:30～16:00

②水曜日 夜クラス (原則第2週・第4週) 18:00～20:30

③木曜日 夜クラス (原則第2週・第4週) 18:00～20:30

定員／各クラス8名程度 料金／受講料 20,000円

お問い合わせ (現代座) TEL 042-381-5165 FAX 042-381-6987

上記クラスに木曜日(昼クラス)が追加になりました

◆木曜日 昼クラス (原則第2週・第4週) 14:00～16:00 定員3名

受講生同士の距離の確保やマスク・フェイスシールド・マウスシールドなどの着用をお願いするなど、随分と窮屈な思いをされた方もいらっしゃると思います。感染の心配から、声を出す「朗読」講座に申し込む人も減るのではないかと思っていました。不自由な状況のなかでも、顔を合わせてお互いに何気ない会話をしたり、一緒にテキストを勉強することで、受講生同士の心の交流が深まっていった気がします。

今回は残念ながら発表会は無観客となりましたが、開催できたこと自体が喜びでした。この日に向けて各人が練習をして「衣装を着て晴れの舞台に立つ」。こ

のことは少なからず受講生の元気を支えていたようです。「私、三ヶ月ぶりに口紅を塗ったわ」と笑顔で言う人もありました。長年参加している方で「今回が一番楽しかった!」という感想も聞かれました。そして、みなさん、いつも増して楽しい気持ちで伸び伸びと朗読発表をしてくれました。この状況下でも、安心して行えるようにサポートしてくださったスタッフの皆様には心から感謝しています。発表会を終えて思っているのは、朗読はこんなにも人を感動させ、勇気づけ、励まし、笑わせ、心を豊にさせるということでした。

「コロナ禍で、改めて「朗読」について考えてみますと、朗読は何も特別なことではありません。「本に書いてあることを、声を出して語る」。こんなシンプルなことなのです。しかもかなりの部分を聴いている人の想像力に頼っていますから、①良く書かれた作品を選ぶ、②読み手がきちんと喋る、大抵この2点さえ押さえておけば、いい朗読になるはず。喋ることは日常していることで難しいことはありません。なのに、私自身、春からずっとマスクをして会話をしていると、何度にも人に聞き直されました。「なんでだろう。ちゃんと口を開いていないのかな」。そうです。口を開くのが面倒くさくなっていました。「ああ、これではいけない。いくら良い小説を読んでも、何を喋っているか分からなければ伝わらない」と気づかされました。それで、この半年間、受講生のみさんと一緒に発声・発音の基礎練習で声を出すことは、私にとって、大切な機会でした。

来期の朗読教室も、声を出す楽しさ、清々しさを味わうことから、はじめてみたいと思います。

◆われらいずこより来たる 第2部◆
1959年① 不思議な学校

木村 快

前回までの、資料によるまとめを第1部とし、今回は第2部として、木村快自身が体験した新制作座の歴史を紹介することにする。

◆経済成長への転換期

ぼくは戦前植民地の朝鮮生まれ。敗戦間際になって、父は現地召集で硫黄島へ送られ戦死。母子6人で日本へ引き揚げてはみたものの、父の出身地広島市は原爆で焼け野原。しばらくは九州の筑豊炭坑地帯で暮らす。

1947年（昭和22）に父の戦死公報が発行され、広島との連絡がとれたが、母が病気で倒れたこともあり、ぼくは母と別れて広島との親戚に引き取られた。広島はまだ焼け野原のままだった。教育制度が変わり義務教育で中学へ進学するが、校舎はなく、旧陸軍の倉庫や陸軍練兵場跡での野外授業。それも一日3交代の3部授業でまともな教育は受けられなかった。

1958年からは日雇い労働者の寄り場が開かれていた東京都江東区高橋（たかばし）のドヤ街で暮らしていた。ちょうど経済成長への転換期である。東京タワーの建設がはじまり、都市計画が進み、東京の街はどんどん変わっていた。公共事業が拡大し、寄り場に

東京タワーは1958年暮れに完成した。



は東北からの出稼ぎ農民がどんどんやって来てた。ぼくが働いていた東京湾の

貨物船荷揚げ作業も、足場を渡る人力担ぎ上げからベルト・コンベアー方式に変わりつつあった。22歳になって、何か将来に備えた仕事を見つけなければと考えていた。仕事にあぶれた日は図書館へ通い、文学書を読んだ。それが唯一の自己教育だった。

◆新制作座との出会い

9月頃、友人に連れられて、読売ホールで新制作座の『野盗、風の中を走る』を観た。会場は熱気にあふれていた。結構まじめな時代劇だが、俳優のちよつとした動きに観客が一斉に笑い、拍手を送っている。そして次の瞬間静まりかえる。気がつくとも自分も観客のどよめきの中で一体になっていた。

数日後、また友人に引っぱり張られ、亀戸の労政会館で開かれた合評会に参加した。劇団からは舞台に出ている二人の若い女優が来ていた。二人は参加者の意見を聞きながら一生懸命メモを取っていた。こうした合評会には慣れているらしい「新劇通」らしい数人が真ん前に陣取り、次々と新制作座の演技について批評を始め、それが延々とつづいた。参加者の多くはぼくと同じような労働者らしく、うんざりしながら聞いていた。そのうち女優たちが辛そうにつつむき、メモを取らなくなった。気の毒なのでつい手を上げて発言させて貰った。「ぼくは生まれて初めて芝居というものを観たよ。楽しかった。あんなにみんなが笑って拍手するんだもの。少々いやなことがあっても、あなたたちの芝居を観たら心が晴れて、生きる勇気が湧いてくるよ」

それまで黙っていた労働者たちが一斉に拍手をし、次々と楽しかった部分について話し始めた。会が終わわりそうになったので、こっそり引き揚げよ

うと外へ出たら、劇団の「椎名」と名乗る女性が追っかけてきて、「ありがとう。ぜひ一度劇団に遊びに来て下さい。あなたのこと劇団で話すわ」と言った。

数日後、その椎名さんが訪ねて来て、「今度新制作座で一回限りの特別研究所が開かれるから受験して欲しい」と誘われた。演劇教育ではなく、社会思想の講座が中心だという。講師陣は新制作座を支援する偉い先生たちだという。研究所は夕方からだから、昼働きながら通えるらしい。しかし受験資格が大学卒業者または見込みの者となっていたので断ったが、なぜか主宰者の真山美保さんから直々に呼び出しがあり、研究所で学ぶよう説得された。

ぼくは早稲田大学近くの鶴巻町に移り、高田馬場の日雇い寄り場で日銭を稼ぎながら、1959年2月から7月までの半年間、西武新宿線でのこの学校に通った。

◆不思議な学校・時代が読める教育を

劇団は創立7年目を迎え、本格的に運営・作家・演出家などの中心スタッフを育てなければならぬ時期であった。そこで特別劇団員として名を連ねていた福田定良教授（前号参照）が、同じく支援する教育者たちと呼びかけ、塾のような形で個別教育のできる学校を開くことになったという。

受講生は英文科、仏文科、ロシア語科、芸術学科出身者で、在学中に上演経験を持つ者が選ばれていた。中には学生演劇の作家賞を受賞した者もいたし、ロシア語でメモを取るつわものがいったりして、ぼくにとても想像もつかない別世界だった。

◆新劇人教育としては前代未聞

この不思議な学校は知識人の間でも関心が高まって

◆新制作座の本部・稽古場は西部新宿線井荻駅(杉並区)のすぐそばにあり、建坪120坪2階建て、木造だが新しくて気持ちのいい稽古場だった。講義は週6日、午後5時から9時まで。家に帰り着くのはいつも夜11時を過ぎていた。



- 【常任講師】
- 社会科学 舟橋尚道 (法政大学教授)
 - 哲学史 高桑純夫 (愛知大学教授)
 - 日本歴史 松島栄一 (東京大学教授)
 - 日本文化史 郡山純雄 (法政大学教授)
 - 西欧文化史 大島辰雄 (法政大学教授)
 - 言語学 大久保忠利 (日本語学学会)
 - 体育パレエ 館石昭子 (日本体育大学講師)
 - 声楽 永井智子 (二期会)
- 【特別講師】
- 秋田雨雀 (舞台芸術学院学長)
 - 児玉好雄 (舞台芸術学院主事)
 - 青野季吉 (評論家)
 - 大島康蔵 (教育大学教授)
 - 藤島宇内 (詩人)
 - 大島 清 (法政大学教授)
 - 高杉二郎 (静岡大学・共立女子大学教授)
 - 福田定良 (法政大学教授)

いたが、新劇界の反応は冷ややかだった。1959年春に出版された演劇雑誌『新劇』の特集コラム(岡目八目放談会)と言う記事に「新制作座は少しおかしいなんじゃないか。演技の勉強を全然やらずに大衆の演劇云々と云ってる。あれは新興宗教だよ。真山のネームヴァリユーだけで、真山美保とその劇団だ。ドサ回リ専門劇団だね。女剣劇みたいな」とあった。

たしかに演劇に関する科目は全くなかった。講義は初心者でも近代哲学や思想分野に関心が持てるようにと、6ヶ月かけてデカルト、カント、ヘーゲル、ジョン・ロック、エンゲルスなどの主な著作や思想がどのように現代につながっているかを学ぶことだった。

「興味があればどんなまと外れの質問でもよろしい」と大変自由な雰囲気が進められた。それを補足するような日本史、文化史、言語学の講義は楽しかった。

演劇論ではいっぱしの議論をする秀才たちも、哲学や歴史の分野となるとみんな目を白黒させながらノートをとっていた。特にぼくににとっては講義を受けるなどということとは生まれて初めてだし、とにかく聞いたことのない名前や言葉の連続だったから、まるで小学生のように書き取りをしては質問を繰り返した。幼稚な質問に時には質は笑ったが、講師はニコニコしながら岩波文庫や青木文庫にある研究文献を紹介し、「読んでみて、短くてよいかからレポートを出すように」と言ってくれた。レポートを提出すると、講師はぼくにわかるように丁寧に補足し、解説してくれた。

に補足し、解説してくれた。

受講生の中では、ぼくは「タカバシから来た不思議な若者」と好奇の目で見られていたが、それでもみんな親切にやり方を教えてくれた。講師の先生方もぼくに向かつて講義をしてくれるようになった。どうやらぼくに理解できれば、本来の目的である勤労者を対象とした演劇教育になるだろうということだったらしい。

◆真山美保・全国巡演活動で菊池寛賞受賞

ちょうどこの学校がはじまった1959年2月、全国巡演活動を率いる真山美保が第7回菊池寛賞を受賞した。この受賞は一般社会への知名度を広げ、新制作座にとつては絶好の追い風となった。

特別学校の企画には演劇専門学校・舞台芸術学院長の秋田雨雀先生も大変賛同され、学院の卒業が終わった4月には、推薦された卒業生8名が送り込まれてきた。彼らはすでに2年間、専門の演劇教育を受けていたから新劇界の事情には詳しかった。また、舞台芸術学院は学生運動(全学連)にも加盟していたから、政治問題についても意識が高く、学校の雰囲気を変えた。

◆卒業公演はオペラの上演

卒業公演は劇場芸術の可能性を考える体験として、オペラを上演することになった。週に一度、合唱とパレエの基礎訓練がはじまった。こうなると舞芸組は颯爽としていて、全体を巧みにリードしていた。上演作品は万葉集にも謡われた悲劇の女性『真間の手古奈』(服部正作曲)だった。音楽学校などで上演される作品らしい。オペラなんか見たこともないのにタイトを履かされ、女性とペアになってワルツを踊らされる。なんとも恥ずかしく、講師からはいつも指摘された。

「快君、惨めな格好をしないで！胸を張って！」

卒業公演は口コミで広がり、大学や出版関係の人々が集まって大盛況だった。

この学校は新制作座の歴史にとつて、ただ一度の「支援知識人と協力して実現した」特別な学校だった。

◆新制作座8期生となる

7月末、24名中20名が劇団に正式採用され、新制作座の第8期生となる。そして月3000円の手当が支給されるようになった。劇団は一挙に大きくなった感じで、8月からは再演が期待されていた大型作品『馬五郎一座顛末記』の全国公演の準備が始まった。

【次号は1959年②全国巡演の実態】

あれから55年 元気でやっとなるですよ

愛知県尾張旭市・山田敏雄



◆運命の出逢い

あれは1965年のことだから、もう55年前のことになるな。ぼくはバスの運転手になるため、1962年に名古屋交通局に入局していた。職場の映画サークルに加入し、ある日サークルの事務所に行ったら「新制作座争議団」という敵めしい団体の女性が熱っぽく訴えていた。名古屋には新制作座ファンが多く、「新制作座が70名も首を切ったらしいぞ」と驚いていた。訴えていたのは美しい女優さんで杉浦きね子さんと記憶している。破れたピンクの靴から小指が出ていたのを覚えている。それが運命の出逢いだった。

あれ以来ぼくはずっと新制作座争議団、統一劇場、現代座、NPO現代座とかかわり続けている。「希望（1971年）」「オモチャの青春（1972年）」「今日もどこかで（1973年）」と実行委員を続けたが、なかなかチケットが売れず公演は空席が目立ち、ある組合事務所にて点検に行くとき、そのままになつてしまった事が多かった。

◆『ふるさと』で大成

1976年1月、当時国鉄熱田駅の近くの劇団名古屋事務所で「ふるさとみる会」が発足した。このときのオルグは石毛佳代子さんだった。公演は今までと一変して大成功だった。石毛さんに連れられ松竹名古屋支社の試写室で山田洋次監督の『同胞』を観てやっばり実行委員会の劇場づくりはいいなと思った。今でも若い人たちが初めて出逢って取り組みをして貰う時は、必ずDVDを観てもらってから話すようにしている。

◆「結婚」公演超満員の大騒動

1978年に名古屋市民会館の中ホールで3日間公演した。3日目にとうとう会館事務所から入場ストツプが掛かって、入れなかったお客さんに交通費500円を渡してお帰り頂いたこともあった。

終演後、ロビーで実行委員会の若者たちが、チケットを買って貰った観客に囲まれて「良かった、ありがとう！」と言われているのを二階のロビーから眺めるときは本当にうれしかった。

毎年開催されていた全国の仲間が集う「同胞の集い」にマイクロバスを運転して参加したのも楽しい思い出だ。愛知でも二回開催した。

◆統一劇場が三つに分かれて

1983年のことだった。その頃劇団員が百人を超え、劇団は「ふるさとときやらばん」「希望舞台」「グループ出航」と三つのユニットに分かれ、やがてそれぞれ独立して行った。若いメンバーが多い二つのユニットからは愛知の窓口になって貰いたいと頼まれたが、なぜか「グループ出航」からは話がなかった。気になつて消息をたずねてみると、実はほとんどが創立メンバーの家族持ちで、10人以上の子どもを抱えて公演ができず、都内を走り回っていたらしい。「これは大変、なんとかしなくちゃ」と思った。それがまた新たな出逢いになった。

◆『カンナ咲く島』で再出発

当時、ぼくは住む場所も尾張旭市に変わっていたので、新しい地域で「瀬戸線沿線文化をつくる会」を立ち上げることになった。そして1986年のグループ出航（1990年からは現代座と改称）による『カンナ咲く島』の公演で再出発することになった。その後は幅広い取組で実行委員会を作り、ひと回り巾広い人たちと出逢うことが出来るようになっていく。

映画「同胞」のラストシーンで、青年団の愛ちゃん

が「なんであんなに夢中になれたのだろうか。もしかしたら『幸福』とはそういうことではないか」と言う。ぼくはこの台詞が好きだ。そして自分だけが経験するのではなくまわりの人たちにも味わってもらうには、日常の結び付きが大切だと思っている。

◆現在は「はじめ良ければ尾張旭好しの会」

以前木村快さんが「文化とは、その土地の人達が交流する中に有る」「人間が一緒に生きていく絆、それが文化だ」と言われたことがある。正にその通りだと思う。いま振り返って、多くの人達と出逢え続けられたのは、本当に幸福だと感じており、それは劇団と出逢った事に、つきると心から感謝している。



子どもたちを集めての紙芝居
グリーン・シティテレビの画面から

現在は若い人と一緒に「はじめ良ければ尾張旭好しの会」を発足させ、尾張旭市の歴史を学びながら、地域の歴史や文化を子どもたちに伝えていくため、自分たちで紙芝居を制作している。第一回公演を十月十八日に行い、地元テレビでも放映され、町の人に喜ばれた。現在、第二作目に取りかかっている。

◆思えば劇団と出逢って以後、ぼくが知るだけでも二桁の方々が天国に行かれた。ご冥福をお祈りします。

けれど、ぼくは上からお呼びが掛かって、ひ孫をこの手でしっかり抱く迄は、ハッキリお断りをして、皆さんがやり残した分まで、やっばり行きますので暫くお待ちください。「ニックネーム ヤンマー」

誰でも参加できる みんなのリトルコンサート



「リトルコンサート」は音楽のジャンルを問わず、どなたでも参加できるコンサートです。2008年クリスマス第1回から年2、3回のペースで開催しており、2020年11月1日に現代座小ホールで行われたコンサートで36回を数えました。

2014年に初めて現代座を訪れた時、グランドピアノがあり、舞台があり、照明設備がしっかりしていて、客席が約50席の暖かい雰囲気がとても気に入って、「こちらでコンサートを開かせていただけないか？」と恐る恐る伺いました。即座にご快諾いただき、それ以来多くの回を重ね今日に至ります。東京はもちろんのこと、遠く静岡県三島市、神奈川県厚木市、横浜市、川崎市からも出演者が集まっています。

◆誰でも参加できるコンサート

リトルコンサートは幼児から89歳（今までの最高年齢）までの演奏者が、ピアノ、歌、フルート、合唱、バンドアンサンブル、など、それぞれの腕前を披露し、お互いを聴き合います。子ども同志で、あるいは親子や兄弟姉妹で連弾やアンサンブルをすることによって、自分以外の人と力をあわせて演奏することのたいへんさや面白さも学んできました。参加メンバーの中には障がいのあるお友だちもいます。

演奏が終わったら客席の椅子をぐるりと輪に並べ、一人一言自分の気持ちを述べる時間があります。自分の演奏の反省点や近況報告、他の人の演奏に対する感想など内容はさまざまですが、この場での発言をきっかけにしてメンバー同志がさらに切磋琢磨し、心の交流を深めています。

◆「くまのこグループ」の活躍

障がいのあるお友だちは色音符楽譜とピアノの鍵盤に貼った色つきシールに助けられながら丁寧に練習を重ね、10年にわたりたくさんの曲を弾いてきました。まさに「継続は力なり」の言葉通り、地道な努力が実ってきています。そして障がいのあるお友だちとそれを支える大人が一つになって活動する「くまのこグループ」が生まれました。

「くまのこグループ」ではそれぞれの個性と得意分野を活かし、日本の誇るべき作曲家湯山昭の作品や、日本童謡協会所属の詩人・作曲家の作品を演奏し世に広



めること、パソコンによる色音符楽譜の作成と普及、日本の伝統文化である紙漉き技法による和紙の製作や、水引のオリジナル作品の製作、などを行っています。これらの日本文化を伝える作品は国内のみならず、すでにヨーロッパの地に渡り、現地の方々に温かく迎えられています。この活動は、音楽によって心が一つになった仲間だからこそできる活動であり、障がい者の自立支援の一助となればたいへん幸せに思います。

◆伝統音楽と世界音楽の絆

日本におけるクラシック音楽は明治期に入ってきたと言われていますが、起源は古く、安土桃山時代にはグレゴリオ聖歌が演奏されたという記録が残っています。その後キリスト教弾圧令などによって、グレゴリオ聖歌は、オラショ、ぐるりよぎ、箏曲「六段」などに姿を変え、細く長くではありますが日本の中に根付いてきました。私たちも今日まで繋いできた日本の伝統や音楽の輪、文化を次世代の子どもたちに伝えていくことの大切さを感じています。

できる限り長く、そして、できるだけ多くの人に参加していただきながら、リトルコンサートを続けていけたらと思っています。

津田直美・哲子

(つだ なおみ・のりこ)

★ ★ ★ ★ ★

リトルコンサート出演者は随時募集中です。興味のある方は是非ご連絡ください。



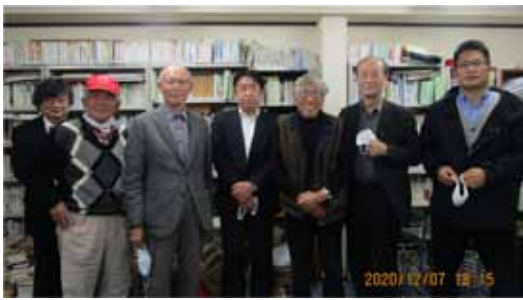
津田連絡先 電話 050-3136-4409
メールアドレス music@voce.gr.jp

現代座会館の活用めざすタスクフォース結成

現代座は56年前の1964年のクリスマス朝、それまで働いていた全国巡演劇団・新制作座から70人の若者が何の予告もなく突然解雇されたことから始まりました。行き場のなかった私たちは「時代錯誤の原始共産制だ」と笑われながら、子どもや母親も丸ごと一緒に暮らしました。上演活動は全国を訪ね歩き、地域の若者たちと上演実行委員会をつくって、地域の催しとして芝居を上演しました。

1973年に現代座ホールを建設したとき、全員で所有する方法を探したのですが、そんな方法はなく株式会社になりました。そして今、代表者の木村快も85歳になります。われわれがいなくなっても、この施設をなんとか人々のために役立てられないか、60年に及ぶ全国での地域上演活動の資料をどうするかが課題となっていました。

幸いなことに、江戸時代の「協同」を扱った『武蔵野の歌が聞こえる』上演活動を通して、みんなで資本を出し合っ



現代座ホールの今後のあり方についてはワーカーズのリードで、様々な分野の人々が集まって検討する「タスクフォース」が結成され、10月12日に第1回、12月7日に第2回の検討会が開かれました。労働者協同組合連合会名誉理事の永戸祐三さんをはじめとするワーカーズメンバーや現代座を支援する人々、NPO現代座のメンバーが集まり、議論を進めています。

現代座会館 9月～11月 活動日誌

9月10、11日 「現代座レポート83号」 発送作業

14日 「川崎平右衛門研究会」 事務局会議

24日 「川崎平右衛門研究会」 事務局会議

29日 ワーカーズ永戸氏、吉原氏来訪

10月12日 現代座タスクフォース会議

18日 社会連帯onno 総会参加

22日 「川崎平右衛門研究会」 事務局会議

11月8日 緑町第2町会役員会

20日 「第4回川崎平右衛門研究会」 国分寺市第3木曜日「緑町ふれあいサロン」

「現代座ホール」

9月12～26日 スタジオポラーノ

10月17～26日 燐光群 稽古

11月7～12日 スタジオポラーノ 「注文の多い料理店」 稽古公演

11月11、13、14日 松崎サンディアス写真撮影

20～23日 劇団 e.u.i. 「どんぐりと山猫」 稽古

29～12月1日 ふるきやう 「瓶ヶ森の河童」 稽古

「三階小ホール」

9月13日 現代座「風は故郷へ」 稽古

10月11日 現代座「風は故郷へ」 稽古

11月1日 津田リトルコンサート

11月8日 現代座「風は故郷へ」 稽古

月2回 今井「岡田京子歌の講座」

隔水曜・木曜日 朗読教室

毎火曜・木曜日 ヨガ教室

【定期使用 一階サロン】

毎水曜日 熟年パソコンサークル

隔木曜日 i-pad 熟年講座

NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

★年会費（現代座レポート購読料を含む）

- 一般会員 3,000円
- 協賛会員 10,000円（1口以上）
- 郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座